



慶應義塾大学医学部北里柴三郎未来人材育成基金

2025 年度 学生留学報告書



仲間と切磋琢磨したこの4週間は、自分にとってかけがえのない時間でした。

今回得た新たな知見を、日本の医療の発展と誰かの幸せな人生に寄与できるように、勉強を続けたいと思います。



志を継ぐ学生たちへ、変わらぬ応援を。

▼基金の活動内容や、寄付の詳細についてはこちらをご覧ください
[北里柴三郎未来人材育成基金 公式ページ](#)
(皆様の想いが、学生たちの未来を拓く力になります)





いつも慶應義塾大学医学部を温かく見守っていただき、心から感謝申し上げます。

私たちの医学部の礎を築いた初代学部長、北里柴三郎先生。その「実学の精神」を次世代へつなぐために生まれたのが、この「北里柴三郎未来人材育成基金」です。皆様からの温かなご支援により、今年も多くの学生たちが大きな一歩を踏み出すことができました。

今回、皆様のお力添えをいただいて、2025年度に海外臨床留学という貴重なチャンスを掴んだ52名の学生たちの声を、一冊の報告書にまとめました。

慣れない異国の地で、必死に、そして目を輝かせながら医学の深淵に触れる彼らの姿は、まさに未来の医療を切り拓く希望そのものです。ページをめくるたびに、皆様の想いが、いかに学生たちの情熱を形にし、彼らの背中を力強く押しているかを実感していただけるはずです。

これからも、若き医学生たちが安心して挑戦し続けられるよう、変わらぬ温かなご支援をいただけますと幸いです。皆様と一緒に、未来の医療をつくっていただけることを、何よりの喜びと感じております。

今後とも、どうぞよろしく願い申し上げます。

2026年吉日
慶應義塾大学医学部

目次

University of Cologne.....	1	National Taiwan University	16
Erasmus University	3	Northwestern University.....	17
Universitätsklinikum Essen	4	National University of Singapore.....	19
University of Hawaii.....	5	University of Sao Paulo.....	20
Medical University of Innsbruck.....	6	Sorbonne University.....	21
Karolinska Institute	9	Stanford University	23
King's College London.....	10	University of Sydney	24
Lille University	13	Universitätsklinikums Tübingen.....	26
Faculté de Médecine Lyon Est	14	Vall d'Hebron University Hospital.....	27
Mahidol University.....	15	Washington University in St. Louis	28



University of Cologne

ケルン大学での実習を通して、ドイツは言語や人種の違いに非常に寛容であると感じました。そのため、英語であっても自分の意思をしっかりと伝え、積極的に実習に参加する姿勢を示せば、経験の幅を広げられる環境でした。実際に私もさまざまな知識や手技を学ぶだけでなく、他の場面で応用したり、実際に手を動かして練習させていただく機会を得ることができました。また、疾患の傾向や学生に求められる学習内容も日本とは異なり、事前に準備していたとはいえ、多くの学びがありました。

本塾では決められたスケジュール中心の実習が多い一方、ケルンでは自ら行動し学ぶ必要があり、1日1日が非常に刺激的でした。

ドイツは比較的物価が安く生活費は抑えられたものの、住居費や中東情勢の悪化による飛行機の直前変更で予想外の出費もあり、支援してくださった方々の助けなくしては成り立たない実習でした。深く感謝しております。

2026年2月9日から3月6日まで、ドイツのケルン大学病院整形外科で実習をさせていただきました。言語面では不安があったものの、周りの先生方や学生の方の温かい支えにより、有意義な実習にすることができました。実習では、カンファレンスへの参加、病棟業務の補助、手術見学など多岐にわたる活動を行いました。特に病棟業務は、採血やガーゼ交換といった日本では経験しにくい実践的手技を学ぶ貴重な機会となりました。さらに、現地での生活を通じて、ケルンの歴史や文化への理解も深めることができました。本実習で得た経験は、今後の自分自身の成長に大きく影響を与えたと考えます。本実習を支えてくださったすべての皆様、本当にありがとうございました。

私はドイツ・ケルン大学病院消化器内科にて、1ヶ月間の臨床実習に参加しました。実習では採血や血液ガス分析、新規入院患者への対応などの業務を現地医学生と同様に行うとともに、日本とは異なる疾患や治療についても学ぶことができ、充実した日々を過ごしました。ドイツでは医学生も医療チームの一員として明確な役割を担っており、日本との教育・医療の違いを実感するとともに、医学生としての自身の意識にも変化が生じました。言語や文化の壁がある中でも、英語やドイツ語を用いて患者と信頼関係を築き、診療内容を理解して議論する経験を通じて、将来海外で働くという目標に近づくとともに、今後の課題にも気づくことができました。本留学は多くのご寄付とご支援によって実現したものであり、このような貴重な機会を賜りましたことに心より感謝申し上げます。本経験を糧に、将来は国際的に医療に貢献できる医師となるべく、今後とも一層努力してまいります。

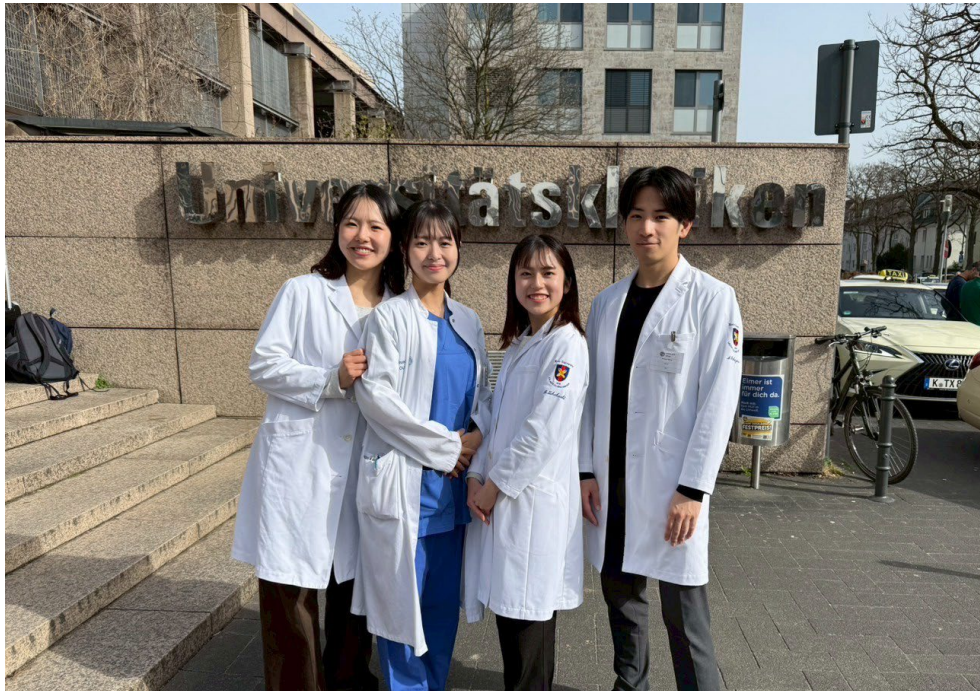
ドイツの大学病院耳鼻科での実習を通して、日本とは異なる医療現場を肌で体感することができました。現地では世界中から集まる医学生と交流し、特に医学部6年生が初期研修医に近い役



割を担う教育制度と、学生の裁量権の大きさには驚きを覚えました。私自身も主体的に動き、病棟での採血業務などに積極的に携わりました。

自由度が高い環境の中、現地の学生と協力して病棟業務や外来陪席を行ったり、手術室では手洗いをしてオペに参加して、移植手術における縫合を任されたりと、貴重な実践経験を積むことができました。

また、移民比率の高さに伴う患者層の多様性とチーム医療のあり方や、手術中の休憩確保といったパフォーマンス向上のための合理的な働き方など、多角的な視点から刺激を受け、自身の将来の医師像を考える上で非常に有意義な時間となりました。





Erasmus University

この度、オランダ・ロッテルダムの Erasmus MC にて心臓胸部外科と消化器・肝臓内科で2週間ずつ実習する機会をいただきました。心臓胸部外科では、冠動脈バイパス術や弁置換、心臓移植など多くの手術を見学しました。オランダでは臓器移植にオプトアウト制度が採用されており、ドナー数が多いため移植医療が日常的に行われています。そのため、心臓移植や肺移植を実際に見学でき、日本では得難い貴重な経験となりました。また、ドナー心の保存ボックスなど周辺の医療技術についても学ぶことができました。消化器・肝臓内科では、EUS や ERCP などの内視鏡手技を見学し、診断から治療に至る臨床判断のプロセスについて理解を深めることができました。本留学で得た経験を今後の臨床実習に活かしていきたいと考えています。留学の機会をご提供いただいた先生方をはじめ、奨学金によるご支援、現地でご指導いただいた先生方に深く御礼申し上げます。

2026年3月2日から27日までの4週間、オランダロッテルダムの Erasmus MC に短期臨床留学させていただきました。Erasmus MC はオランダ最大級の大学病院で、最先端の設備が整っているだけでなく、優秀なコメディカルが揃っており、留学先として素晴らしい病院だと感じました。前半の2週間は心臓胸部外科でした。正中開胸、右肋間の小開胸、胸腔鏡など様々なアプローチで、AVR, MVR, PVR, TVR, CABG, LVAD, 心内膜腫瘍摘出、気道切除、心臓移植など多様な手術を見学することができました。後半の2週間は整形外科でした。私の興味のある分野に合わせてスケジュールを組んでくださり、オペ室や外来にて、サッカー選手やダンサーの怪我といった専門的な内容を間近で見学することができました。4週間を通して、通常の慶應義塾大学病院での実習では経験できないような貴重な症例を数多く見ることができ、大変有意義な実習となりました。



Universitätsklinikum Essen

ドイツの Essen University Hospital 心臓外科にて、4 週間の臨床実習を行った。個人応募により渡航した。実習期間中はカンファレンス、ICU 回診、手術に参加した。大動脈手術、弁膜症手術、冠動脈バイパス術など多様な症例において術野に入り見学し、ICU では Impella や ECMO などの体外循環管理を実践的に学んだ。さらに低侵襲心臓手術 (MICS) も数多く見学し、術式の工夫やチーム医療の重要性について理解を深めた。多国籍な医療環境の中で、英語による意思疎通の重要性に加え、主体的に行動する姿勢の大切さを実感した。加えて現地での生活や文化、医師の働き方に触れ、自身の将来像を具体的に考える契機となった。今後の学習意欲を一層高める、極めて有意義な経験となった。さらに、現地の医師や学生との交流を通じて、異なる価値観や医療観に触れたことも大きな収穫であった。今後は本経験を基盤として、更なる知識と技能の向上に努めたい。



University of Hawaii

2026年3月2日から27日にかけて、ハワイの Kuakini Medical Center で3週間の内科、1週間の家庭医療科での実習を行いました。Internal medicine ではハワイ大学の Internal Medicine Residency Program のレジデント2人ずつの4チームで構成されておりその中の一つのチームに配属となります。問診や身体診察、ケースプレゼンテーション、エコーなど多くのことを経験することができました。家庭医療科では、主に外来見学と訪問診療を行いました。この4週間を通して、アメリカの医学教育のレベルの高さを実感する1か月となりました。はじめは慣れないことも多く不安なこともありましたが、互いに教え合うことを大切にしている Kuakini Medical Center では、丁寧に様々なことを教えていただくことができました。また総合内科領域は日本ではアメリカと比較するとまだまだ未発達な部分が多いと感じ、将来性のある分野だと強く感じました。自分のキャリアを見つめ直す良い機会となりました。



Medical University of Innsbruck

この留学を経て、自分自身の一番大きな変化は「異国への苦手意識の薄れ」でした。言語の壁、価値観の壁があると思い、避け続けていた 23 年間がこのプログラムを通じて変わったように感じました。留学中、自分なりに目標を掲げ、準備期間も含め我武者羅に動いてみたものの、結果として何かものすごいものを得たという断言はできません。思い返せば、英語力も思うように伸びず、現地でも「もっと勇気があれば」と唇を噛み締める瞬間は何回もありました。ですが、今はこの経験を次の「挑戦」をしていく糧にしたいと前向きに思い直し、次の機会を楽しみにしています。

最後になりますが、どんな瞬間でもこの留学において感じることは、「周りへの感謝」です。奨学金など金銭面での多大なるバックアップをしてくださった関係者の皆様をはじめとし、この留学を成り立たせて下さった全ての方々へ心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

本留学では、オーストリア・インスブルック医科大学において血管外科実習に参加し、手術補助や病棟業務を通じて実践的な臨床経験を積むことができました。特に、学生の主体性を尊重し、実際の手技に関わる機会が多く与えられる教育体制や、患者との対話を重視する診療姿勢から、日本の医療との違いを多角的に学ぶことができました。また、異なる言語・文化環境の中で主体的に行動する重要性を実感し、医療者としての視野を大きく広げる貴重な機会となりました。





本留学は寄付によって支えられており、このような機会を賜りましたことに心より感謝申し上げます。

オーストリアのインスブルック医科大学にて1ヶ月間の臨床実習を行いました。移植外科および消化器内科に配属され、欧州トップクラスの件数を誇る移植医療の最前線や、現地の医学生が若手医師に近い裁量と責任を持って問診・手技を担う、極めて実践的な臨床教育を肌で学ぶことができました。

さらに、家庭医（GP）との連携による病棟運用の工夫や、医師のワークライフバランスをシステムとして守る文化にも触れ、日本とは異なる医療体制のあり方を多角的に吸収し、医師としての視野を大きく広げるという目標を達成できました。

このかけがえのない経験は、皆様からの多大なるご寄付と温かいご支援があってこそ実現したものです。心より深く御礼申し上げます。本留学で得た学びを糧とし、将来は社会や患者さんに広く還元できる医師となるべく精進して参ります。



写真：市街地の風景

私は2026年3月の約4週間、オーストリアのインスブルック大学にて整形外科および移植外科の実習を行いました。実習では日欧の医療現場における手技の共通点を確認し、腎・肝移植等の高度な手術を見学する貴重な機会を得ました。

現地では言葉の壁がありながらも、採血の練習台を自ら買って出る学生や親身な医師など、多くの温かい支援に支えられました。この経験を通じ、医療において技術と同様に大切な「他者への思いや





り」を肌で感じることができました。異文化での学びは、患者の心に寄り添える医師になりたいという志をより強固にしました。

最後になりますが、本プログラムをご寄付で支えてくださった皆様に心より感謝申し上げます。皆様のご支援のおかげで、学生という多感な時期に世界基準の医療を体感し、成長することができました。この恩恵を糧に、将来の医療発展に貢献してまいりたい所存です。



Karolinska Institute

私は 2026 年 2 月 16 日から 3 月 15 日までの 4 週間にわたり、スウェーデンの Karolinska Institute の University Hospital Huddinge にて、消化器外科で実習をさせていただきました。現地では 1 週間ごとに、肝臓・外科救急・膵臓・胃食道の班を回り、毎日の回診と手術見学を通して、手術手技やドレーンを中心とした術後管理を学びました。言葉の壁に苦勞しつつも、病院の国際的な環境に助けられながら、初めて腹壁を閉じるという経験を踏んだ他、ドレーン留置や皮膚閉創の際のスタイルの違いも発見しました。実習の最後には、「真皮埋没縫合による皮膚閉創はステープラーに比して手術部位感染を減らすか」というテーマでプレゼンを作成し、英語で発表・ディスカッションを行う機会にも恵まれました。寄付をくださった支援者の方をはじめ、ご協力くださったすべての方に心より感謝申し上げます。留学で得た学びを今後の医師人生に活かし、日本の、世界の医療を先導するリーダーとなれるよう、精進してまいります。



この度は医学部短期海外留学プログラムを通じ、このような素晴らしい機会をいただき、心より御礼申し上げます。今回の留学は、多くの皆様の多大なるご支援のおかげで実現したものであり、私自身の力では決して成し得なかった、非常に恵まれた経験であると、強く実感しております。

スウェーデンでの臨床実習を通じ、主に若年の性行動や中絶、妊娠・出産に関する日本との制度差を具体的に比較・分析しました。こうした学びや現場での診療観察を通して、制度設計が個人の権利保障や社会的な安全網にどのように影響するかを具体的に理解することができました。

これから先、臨床医として働いたり、研究を続けたりする上で、今回得た新たな知見を、既存の知識や日本の現状と丁寧に照らし合わせながら、わずかであっても日本の医療の発展と、誰かの幸せな人生に寄与できるように、これからも勉強を続けたいと思います。



King's College London

2026年2月に King's College London にて精神科臨床実習を行い、Maudsley Hospital および Bethlem Royal Hospital での実習を通して、英国の精神科医療における多職種連携、患者中心の診療、多文化社会に対応した医療体制について学びました。Ward Round や ECT、CAMHS の見学、医学部授業への参加を通して、日本とはまた異なる視点からチーム医療の重要性と社会復帰を見据えた支援のあり方を実践的に理解することができました。また、さまざまな国からの留学生との交流や文化体験を通して国際的な視野を広げることができました。本留学は寄付によるご支援によって実現したものであり、この貴重な機会を与えてくださった支援者の皆様に心より感謝申し上げます。今回の留学期間を通して得られた人間関係は私にとって一生の財産です。この1ヶ月で得た発見と学びを胸に、お世話になった方々に恩返しできるよう、立派な大人、そして立派な医療人になります。



King's College London の整形外科・外傷外科では、重症患者から機能回復がメインの予定手術患者まで幅広く治療にあたる医療スタッフのもとで学び、英国の公的医療制度である NHS の実際について理解を深めることができました。世間で言われているように待機時間が長いという実情は確かにありましたが、「その分患者さんと向き合う時間を長くとり、深い関係構築を目指し診療にあたっている」という指導医の言葉が強く印象に残りました。医療制度や文化の違いを実際



の臨床現場で体感し、医療を提供することについて改めて考える貴重な機会となりました。

今回は1ヶ月にわたりロンドンにて留学をさせていただきました。このような貴重な経験を得ることができたのは、留学プロセスを通してサポートいただいた先生方や学生課、国際担当の皆様、そして奨学金としてご寄付を賜りました多くの方々のおかげと存じます。この場をお借りして心から感謝申し上げます。

KCLで過ごした1ヶ月は、医師としても一人の人間としても、生涯にわたり自分の中核となる貴重な経験でした。海外での実習はおろか、自分で暮らすことも初めてだった私は、日本との違いに驚き、比較する中で、新たな課題や視点に気付かされる毎日でした。自分の慣れ親しんだ枠組みの外に出ることでしか得られない知識、考え方があるのだということを実感しました。もっと医学、英語を勉強したいとも思えました。今後も研鑽を重ね、グローバルな視点で物事をみて、患者さんにより良い医療を提供することのできる医師を目指していきたいです。

2026年3月の1ヶ月間、英国 King's College Hospital の救急科で臨床実習を行いました。実習当初、積極性の重要性を痛感し、自ら「問診と身体診察をしたい」と志願してからは、一人で患者を担当し上級医へプレゼンする機会を数多く得ることができました。また、IV access ユニットでは看護師の指導のもと、静脈採血やルート確保といった侵襲的手技を繰り返し実践し、臨床技能を大きく向上させました。さらに、依存症治療やNHSの8時間に及ぶ待機時間の現状を患者・学生双方の視点で経験し、英国の社会課題と医療システムへの理解を深めたことは大きな成長です。

こうした貴重な成長の機会は、皆様の温かいご寄付による支援制度に支えられたものです。経済的な不安なく学業に専念し、国際的な視野を広げられたことに深く感謝いたします。この経験を糧に、将来は質の高い医療を社会に還元できる医師を目指し、精進してまいります。





留学では、臨床現場における小児外科医療と術後管理について深く学びました。King's College Hospital は英国でも数少ない小児の肝胆膵症例が集まる施設であり、毎週多くの葛西手術（胆道閉鎖症）や総胆管嚢胞の症例を見学できたことは大変貴重な経験でした。世界的に著名な教授の手術では積極的に質問を受け、空き時間には他の医師の方々からも丁寧な指導を受け、理解を深めることができました。また、小児外科診療における他科との協力（放射線科、麻酔科など）や英国の NHS の仕組みについても学び、医療体制の違いを実感しました。さらに、英国は多国籍社会であり、医師や患者も多様な背景を持つ方々で構成されているため、様々な価値観に触れることができ、医療従事者としてだけでなく、人としての視野が大きく広がりました。これらの貴重な学びの機会は、寄付による奨学金の支えがあってこそ実現したものであり、心より感謝申し上げます。



Lille University

今回私は Lille 大学で放射線科の実習をさせて頂きました。1 週目は一通り筋骨格班の行う業務を見学させて頂きその後は主に救急における放射線読影班で実習を行いました。救急という性質上、外傷による骨折疑いが多く、解剖学の良い復習となりました。又、症例が多い時には先に画像を見ておいて先生にどのような症例か説明する、患者さんに放射線レポートを渡して説明する、更には先生方の監修の下で放射線レポートを書くといった事も体験させて頂きました。このようにフランス語やその他の言語をフル活用しながら様々な言語的・社会的バックグラウンドを持つ医師や患者さんと触れ合う機会を持つことが出来、また診療チームの一員として一ヶ月間受け入れて頂きました経験は、予想を遥に上回る素晴らしいものでした。

このような貴重な機会を与えて頂きました事に心より感謝申し上げます。

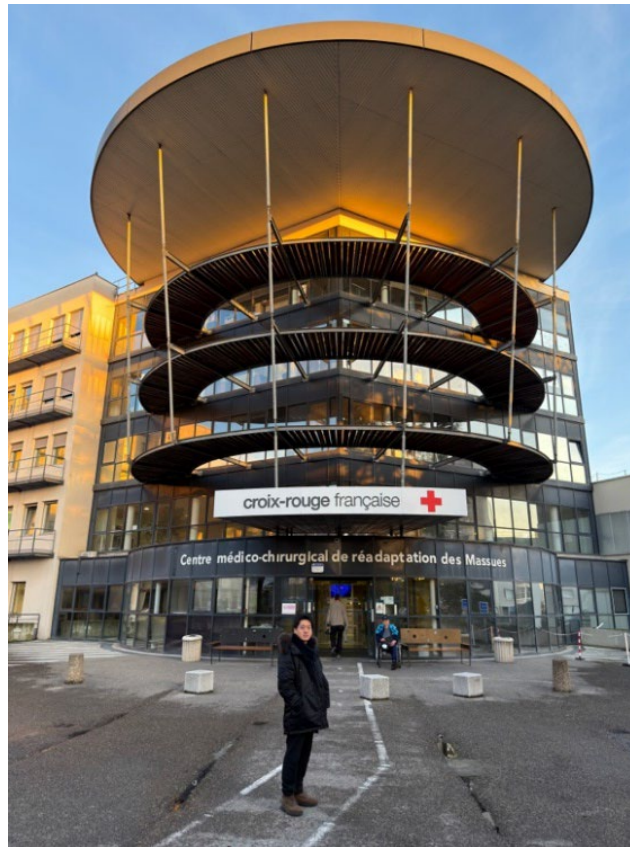
本留学では、フランスのリール大学病院血液内科における実習を通じて、医療制度や多職種連携、患者との関わり方が日常診療にどのように影響しているかを学びました。特に、患者が主体的に意思決定に関わる姿勢や、役割分担の明確なチーム医療の実践は、日本との違いとして強く印象に残りました。また、同年代の医学生の姿を通して、自身の現在地を見つめ直す貴重な機会にもなりました。今回の経験により、医療をより広い視点で捉える重要性を実感するとともに、今後の臨床・研究への明確な課題を得ることができました。本留学は寄付によって支えられており、このような機会をいただけたことに深く感謝しております。今後は本経験を還元し、より良い医療に貢献できるよう努めてまいります。





Faculté de Médecine Lyon Est

この度は本留学の機会をご支援頂き、誠にありがとうございました。おかげさまで、フランス・リヨンでの小児整形外科の臨床実習において、日本と異なる環境での診療に携わることができました。具体的には、側弯症外来では身体所見の取得から画像評価、手術適応の検討までを行い、診療の流れを経験しました。また、手術では第一助手として複数の症例に参加し、実際の術野での立ち回りや術式を学ぶことができました。さらに、リハビリテーションや歩行解析についても学び、整形外科における、手術から機能回復までの流れに付き添うことができました。この体験は、整形外科を志す上で、これからの将来を支える、かけがえのない体験になったと思います。本当にありがとうございました。最後に、本留学は多くのご支援によって実現したものであり、このような貴重な機会を賜りましたことに心より感謝申し上げます。





Mahidol University

この度は留学プログラムへの温かいご支援を賜り、誠にありがとうございました。おかげさまで、タイ・シリラート病院にて外傷外科および感染症科の実習に参加し、日本との医療体制や患者背景の違いを実感する貴重な機会を得ることができました。外傷診療では、交通事情や生活環境の違いが外傷の発生に大きく影響していることを学び、感染症診療では HIV 外来における継続的な薬物療法と生活習慣管理の



重要性、さらに患者一人ひとりに十分な時間をかけて向き合う姿勢に深い感銘を受けました。また、多国籍の医学生との交流を通じて、各国の医療制度や文化的背景への理解を深め、自身の視野を大きく広げることができました。本留学で得た学びと経験を今後の医療者としての成長に活かし、社会に還元してまいります。改めまして、心より御礼申し上げます。

2026年3月にタイのマヒドン大学シリラート病院で4週間の臨床実習を行いました。ID科と外傷外科での実習を通じ、日本と異なる医療制度や診療体制、熱帯特有の疾患について学びました。特に、保険制度により使用可能な薬剤が制限される点や、医学生が主体的に診療に関わる点が印象的でした。また、多国籍の留学生との交流を通じて文化や価値観の違いに触れ、視野を広げる貴重な機会となりました。本経験から、環境への適応力と主体的に学ぶ姿勢の重要性を実感しました。最後に、本留学を支えてくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。



National Taiwan University

2026年3月に国立台湾大学病院にて4週間の臨床実習を行いました。TOEFL89点で応募しましたが当初希望していたフランスには届かず、台湾での実習を選択しました。整形外科では手術見学が中心で主体性が求められる一方、家庭医学では回診・外来・訪問診療など幅広い経験を得ることができました。中国語環境の中で医療英語の重要性を痛感し、事前準備の不足を反省しました。また台湾の予防医学や医療体制の先進性にも触れました。生活面でも自立を経験し、今後の学習方針を明確にする貴重な機会となりました。



私は2026年3月に、国立台湾大学で1か月間の臨床実習を行いました。消化器内科と家庭医学を2週間ずつローテーションし、英語でのカルテ記載や症例検討会、回診・外来・訪問診療など、日本では得難い経験を積むことができました。特に、教授や指導医の先生方による熱心なご指導や、現地学生との交流を通して、医学知識だけでなく医学英語や異文化理解も深めることができました。また、台湾のIT化された医療制度や外来診療体制など、日本との医療システムの違いにも触れ、大きな刺激を受けました。実習外では夜市巡りや各地への旅行も楽しみ、非常に充実した1か月を過ごしました。この経験は自分にとって大きな財産となったので、後輩の皆さんにもぜひ挑戦してほしいです。



Northwestern University

この度、短期海外留学プログラムを通じて、2026年3月2日から27日までの4週間、Northwestern 大学小児アレルギー・免疫科にて実習に参加させていただきました。気管支喘息や食物アレルギーといったコモンなアレルギー疾患から、原発性免疫不全症候群などの希少疾患に至るまで、幅広い症例の診療に主体的に携わることができました。日本では未だ承認されていない最新の検査や治療法について学ぶ貴重な機会となるとともに、これらを日本に還元していくためには、国際的な視点を持ち学び続ける必要があると痛感いたしました。また、私的な医療保険が主たる財源となっているアメリカの医療現場を体感し、近年持続可能性が議論されている日本の国民皆保険制度について見つめ直す契機ともなりました。このような貴重な経験を得ることができたのは、皆様の温かいご支援の賜物です。心より感謝申し上げます。

Northwestern University での4週間の臨床実習では、急性期心疾患管理の最前線を学びました。CCU での毎朝5時からの準備や、重症心不全外来での予診・身体診察の実践を通じ、米国における「Student Doctor」として主体的に動く重要性を痛感しました。特に外来で Assessment から Plan までを一人で立案した際、自身の知識不足を突きつけられた経験は、悔しさと共に将来への強い学習意欲に繋がる最大の財産となりました。

このような貴重な挑戦の機会は、寄付者の方々の温かいご支援によって支えられています。経済的な不安なく実習に没頭し、世界最高峰の医療現場で自身の現在地を知り、将来への確かな指針を得られたことに、心より感謝申し上げます。この1か月間で得た自信と課題を胸に、将来は国際的な視野を持ち、患者さんに貢献できる医師を目指して精進して参ります。



ノースウェスタン大学小児神経科にて4週間の臨床実習を行いました。病棟では毎朝のプレラウンド後、指導医に対し SOAP 形式の症例提示を毎日実施しました。多職種チームでの活発な議論を通じ、論理的な診断プロセスとプレゼンスキルを深く学びました。外来実習では予診や身体診察を自ら担当し、教育に協力的な患者さんに支えられ、実践的な臨床能力とコミュニケーション



ン能力を養うことができました。

今回の実習は、国境を越えた医療現場の最前線を体験し、自身の将来の医師像をより明確に描く非常に感慨深い機会となりました。医学教育の場を広げ、多大なる学びの機会をご支援くださった奨学金財団の皆様、ならびに関係各位に心より御礼申し上げます。

本実習では、ノースウェスタン大学血管外科にて約1か月間の臨床実習を行った。早朝回診やカンファレンス、手術に積極的に参加し、計36件の術野を経験した。人工血管吻合やデブリードマン、縫合など多くの手技を実践的に学び、さらに心・肺・肝・腎移植など幅広い手術にも参加する貴重な機会を得た。加えて、現地の医療制度や患者背景の違いを実感し、日本の医療との比較から医療の在り方について深く考える契機となった。英語面での不安もあったが、実際には大きな支障なくコミュニケーションを取ることができ、非常に充実した実習となった。

Northwestern University Feinberg School of Medicineにて4週間、リウマチ科の臨床実習を行いました。前半の入院診療では、英語での問診・身体診察をもとにSOAP形式で症例提示を行い、鑑別診断と治療方針を組み立てる力を磨きました。後半の外来では、SLE、シェーグレン症候群、強皮症、血管炎など多様な膠原病症例を学び、身体所見の取り方や臨床推論を実践的に学ぶことができました。また、日米の医療制度や医学教育の違いに触れ、自らの将来像を考える貴重な機会となりました。この留学は、寄付者の皆様をはじめ多くの方々のご支援によって支えられました。心より感謝申し上げます。

私はアメリカの Northwestern 大学医学部小児循環器にて、1か月間の臨床実習に参加いたしました。

本実習を通して最も重要だと実感したのは、主体的に学ぶ姿勢です。現地では、学生が積極的に行動しなければ実践的な経験を得ることはできませんが、主体的に関わることで、指導医の先生方から丁寧かつ熱心なご指導をいただき、学びを深めることができました。予診やプレゼンテーションにも積極的に取り組み、臨床への理解を深めました。



実習は外来2週間、入院2週間で構成され、外来で多くの症例に触れ復習を重ねたことで、入院診療では各患者の病態や治療方針をより深く考察できました。

また、英語環境下でも主体的に学び続けることができ、自信につながりました。本経験は今後の医師としてのキャリアにおいて大きな財産になると確信しております。

このような経験はご寄付によるご支援があってこそ実現したものです。心より感謝申し上げます。



National University of Singapore

2026年2月9日から3月6日の1ヶ月間、シンガポール国立大学にて、新生児科と産婦人科の実習を行い、病棟症例やカンファレンス、外来見学、手術見学などに参加する機会が与えられた。シングリッシュや自らの英語力の乏しさゆえに苦戦することもあったが、シンガポールの方は親日家でとても優しく、充実した日々を楽しむことができた。今回の留学の経験を通して、民族や言語の壁を乗り越えた医療の提供やシンガポールの効率的な医療システムの実現方法、海外から見た日本の国民性や医療の限界および未来について新たな知見を得ることができた。その中でも1番大きな収穫は海外で働くという選択肢が自分の中にできたことである。このような貴重な機会に恵まれたことは感謝してもしきれない。またこれからも受け身の姿勢ではなく、積極的に学ぶ姿勢を忘れず、将来の可能性を広げていきたい。

National University Hospital および Singapore General Hospital において、それぞれ救急科と循環器内科で臨床実習を行った。アジア有数の経済発展を遂げ、多民族国家であるシンガポールという、日本とは医療制度や社会背景が大きく異なる環境で実習を行ったことで、日本の医療をより客観的な視点から捉えることができた。小規模国家であるシンガポールでは医療資源の集約化が進み、効率的な医療提供体制が構築されている一方、医療需要の増加に対する柔軟性や医療者の競争率の高さや自由診療における医療費の家庭への圧迫という課題も感じられた。また、現地の医学生や医師の学び続ける姿勢に触れ、自らも常に学び続ける姿勢を持つことの重要性を強く認識した。異なる医療環境での実習を通じて、日本の医療の特徴や強みを改めて理解することができ、医療を多角的な視点から捉える貴重な経験となった。今後は本実習で得た学びを生かし、卒業後は社会に貢献できる医師を目指したい。

2026年2月、私はシンガポールの National University Hospital および Singapore General Hospital にて、血液・腫瘍内科と総合内科の臨床実習に参加しました。実習を通して、活発な医師同士の議論、多職種との連携、患者さんが自身の意思を積極的に伝える診療文化に触れ、日本との共通点と相違点を学ぶことができました。また、多民族・多文化社会における医療を実際に経験したことで、言語や文化的背景を踏まえて相手と向き合う姿勢の重要性を実感しました。このような貴重な学びの機会は、寄付をはじめ多くの方々のご支援によって支えられているものです。心より感謝申し上げます。この経験を今後の学びと医療への姿勢に生かしてまいります。





University of Sao Paulo

2026年3月、サンパウロ大学 InCor にて小児心臓移植科の臨床実習に参加した。外来・病棟・手術見学やカンファレンスに参加し、循環器医療の高度な体制と SUS による無料医療を学んだ。治安や言語の課題はあったが、バディ制度や現地学生の支援により充実した生活を送ることができた。本実習を通じて医学的知識だけでなく国際的視野を広げる貴重な経験となり、このような経験を得られたことに深く感謝したい。

3月2日から27日までサンパウロ大学医学部にて心不全実習に臨み、午前は外来、午後は病棟を見学しました。実習はポルトガル語で行われましたが、英語のフィードバックにより理解を補いました。多様な症例に加え、日本とは異なる患者背景、医師と患者の距離感や病院の雰囲気、カルチャーショックを受け、ブラジルならではの医療を体感しました。また、希望により弃疾患部門も見学し、講義や聴診を通して学びを深めました。学外でも現地の学生と交流して文化や生活に触れ、部活に参加するなど、非常に充実した研修となりました。

2026年3月に4週間、ブラジル・サンパウロ大学医学部附属病院の消化器外科・大腸肛門科にて臨床実習を行った。中南米最大級のがん専門施設である ICESP を中心に、消化器がん手術や内視鏡検査、外来診療、カンファレンスに参加し、日本との医療体制の違いを学んだ。特に進行直腸がんに対する骨盤内臓全摘術は印象深く、実際の術野を通じて解剖や手術戦略への理解を深めることができた。また、現地ではポルトガル語による議論に苦勞しながらも、英語を用いて積極的に質問や交流を重ねたことで、言語は「完璧さ」よりも「伝えようとする姿勢」が重要であると実感した。さらに、ブラジルの医療制度や文化、現地学生との交流を通じて、自国の医療や価値観を客観的に見直す貴重な経験となった。



Sorbonne University

私はこの度、2026年2月9日から3月8日まで Hôpital Armand Trousseau において小児整形外科の診療や手術を見学し、特に側弯症をはじめとする多様な疾患に対する治療方針や手技について理解を深めることができました。また、医療スタッフ間および患者との活発なコミュニケーションや、多職種が連携して診療にあたる姿勢が非常に印象的であり、医療におけるチームワークの重要性を実感しました。さらに、現地の学生や留学生との交流を通じて、自身の視野を広げる貴重な経験となりました。

本留学は、多くの個人・法人・団体の皆様からのご寄付によって支えられており、このような機会をいただけたことに心より感謝申し上げます。今後は本経験を活かし、医療の発展に貢献できるよう努めてまいります。

今回のフランス パリ サルペトリエール病院の心臓血管外科への短期留学で多くのことを学び成長することができました。他国の医療を目にするのは今回が初めてであり、また他国の医学生と1ヶ月という期間、交流するという経験も初めてでした。これらの経験が医師として今後も続く自主的な勉強へのとても良い刺激となり、一層勉強に励もうと決意することができました。医学以外の面でも慣れない環境で現地の人々と交流する機会が多くあり、積極性という面でも成長できたと思っています。また、これらの素晴らしい経験ができたのは皆様からの多大なご寄付があつてのことであると実感しております。寄付金があることで、近年の物価上昇による航空機や宿泊などの費用の高騰の負担が減りました。おかげで我々学生が1ヶ月という期間、海外の病院で実習をして様々なことを学び成長することができました。大変感謝申し上げます。

私は、本プログラムを通じて、フランス・ソルボンヌ大学の心臓外科にて4週間の臨床実習を行いました。

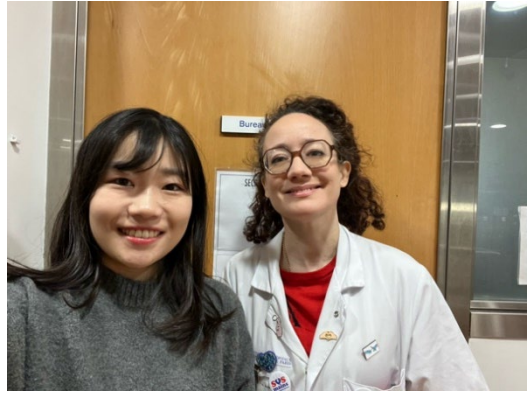
実習では、日本では症例の少ない心臓移植や最新の術式を間近で拝見し、欧州の高度な医療技術に触れる貴重な機会を得ました。また、言語や文化の壁がある中で自ら能動的に学びを掴み取る姿勢の重要性や、将来を見据えストイックに研鑽を積む現地の学生の姿に強い刺激を受けました。単身での生活を通じ、不測の事態への対応力や精神的な自律も養うことができ、医師として、また人間として大きく成長できたと実感しています。

このようなかけがえのない経験ができたのは、寄付者の皆様による多大なご支援があつたからこそです。皆様のご厚意に心より感謝申し上げます。今回の学びを糧に、将来は国際的な視野を持ち、社会に貢献できる医師を目指してより一層精進してまいります。

この度、私は2026年2月8日から3月9日にかけて、フランスパリの Sorbonne Université Faculté de Médecine Hôpital Saint-Antoine AP-HP, Chirurgie orthopédique et traumatologique(外傷整形外科)で実習をさせていただきました。実習では主に手術見学で毎回ガウンを着て術野に入



りました。フランス語での会話は苦勞しましたが、自ら手術後に毎回先生に質問し、現地学生の器械出しや振る舞い方を真似て積極的にコミュニケーションを取るようにしました。術中のカメラ持ちや吸引を始め、自家骨移植の助手などをやらせていただきました。今回の留学を通して、「いかにして自ら考えて行動を取るか」ということの大切さを学びました。この度は、慶應義塾大学医学部北里柴三郎未来人材育成基金奨学金、医学部による留学支援金によりご支援を賜りました。誠にありがとうございました。皆様のご厚意に心より感謝申し上げます。



この度、ソルボンヌ大学依存症科にて臨床実習をさせていただきました。中高を暁星学園で過ごし、フランス語を第一外国語として取ってきた私にとって、再びフランスとのご縁で留学の機会をいただけたことを大変嬉しく思います。

フランスで実習をしていると、日本ではまず起きないようなことがたくさん起きます。それは必ずしも悪いことばかりではなく、むしろ日本が見習うべきこともあります。そして、月並みな言葉ですが、日本で実習をしていると当たり前だと思うことも、全然当たり前ではないことに気づかされ、実習を通して、相手の文化を尊重しながらも、自分たちの文化を相対化して見ることができました。

言語の壁があり、患者さんの言うことをすべて理解できたわけではありませんが、それでも相手の話している様子を見ながら、背景を想像したり、どういう気持ちで受診しているのかを慮ることはできます。

自分でプログラムを探すとなると難しい中で、世界中の大学と交換留学の提携があることはとてもありがたいですし、このような貴重な機会を与えていただけたのは、篤志家の皆様のご支援のおかげであり、このような貴重な体験をすることはできませんでした。改めて、厚く御礼申し上げます。





Stanford University

2026年1月、1ヶ月間にわたり米国カリフォルニア州の Stanford University Hospital にて、肝移植外科の Observership Program に参加いたしました。

実習では、米国最先端の医療現場における高度な手術手技や、多職種が密に連携するチーム医療を間近に学びました。日本とは異なる文化や医療体制に触れる毎日は非常に刺激的で、新たな発見に満ちた学びの多い日々を過ごさせていただきました。現地で活躍されている日本人の先生方との交流も、将来米国の医療現場で働くという目標を具体化する貴重な機会となりました。また、自ら積極的にコミュニケーションを取ることで学びの機会を広げる姿勢の重要性を強く実感いたしました。

本留学は、多くの皆様からの温かいご寄付とご支援により支えられております。このような貴重な機会を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。今回得た学びと志を糧に、国際的な視野を持ち、日本の医療にも貢献できる医師を目指して一層精進して参ります。



University of Sydney

私は University of Sydney での臨床実習を通じて、新しい環境で医学を学び、違った文化の医療に触れたことで大きな刺激を得られました。医学は万国共通であることを改めて実感し、さらに医学を学びたいという思いが強くなりました。また、オーストラリアと日本の医療制度や医療現場での働き方を比較することで、医療をより多様な視点で捉えるきっかけになり、自分の視野を大きく広げる貴重な機会となりました。このような充実した学びの機会が、ご寄付をお寄せくださったすべての方々のご支援によって支えられていることに、深く感謝しております。ご支援くださった皆様に、心より御礼申し上げます。

2026年3月、Royal North Shore Hospital の Medical Oncology にて4週間の臨床実習を行いました。回診や外来に参加し、また英語での病歴聴取や身体診察やカルテ記載に主体的に取り組みました。当初は英語でうまく伝えられず苦労しましたが、回診中に医師の表現をメモし繰り返し真似る中で、次第に自分の言葉で患者さんと対話できるようになりました。多様な文化背景を持つ患者さんと関わる中で、理解度や背景に応じて説明を工夫する必要性を学びました。また、退院調整について家族・患者さん・医師が話し合う時間を設けていることや、外来では一人30分以上かけて治療方針を説明するなど、関係者全員で話し合い、納得の上で治療方針を決定していく姿勢が印象的でした。本留学を通じて、医療英語は実践の中で身につけていく重要性を実感しました。最後に、このような貴重な機会に深く感謝申し上げます。

本留学では、シドニーの総合診療科にて、診断未確定や多疾患併存の患者に対し、臓器横断的に病態を捉える臨床力を養いました。回診やカンファレンス、ジャーナルクラブに参加し、多職種と連携しながら効率的に診療を進める体制を実感しました。特に、診断のついていない患者について検査結果から病態を考察する機会や、身体診察・採血などの実践を通じて、自ら考え行動する力が培われました。また、多国籍の患者に対する問診や通訳を介した診療、ベッドサイドでの迅速な情報共有など、日本との医療体制の違いに触れ、新たな視点を得ました。さらに、英語での議論や臨床実践を通じて自身の課題を明確にし、継続的な学習の重要性を強く認識しました。本研修は寄付によるご支援のもと実現したものであり、このような貴重な機会を頂けたことに心より感謝申し上げます。今後は本経験を生かし、国際的な視野を持ってより良い医療の提供に貢





献してまいります。

この度、慶應義塾大学の海外短期臨床留学プログラムにより、シドニー大学との連携のもと、Royal North Shore Hospital 神経内科にて4週間の臨床実習を行いました。現地では回診や外来、勉強会に参加し、特に脳卒中診療における迅速な初期対応や多職種連携の重要性について、豊富な症例を通じて実践的に学ぶ機会を得ました。特に、問診や身体診察を英語で行うなど主体的に診療に関わり、国際的な臨床能力の基礎を養うことができました。さらに、多様な文化的背景を持つ医師や学生との交流を通じて、各国の医療制度や社会的課題について理解を深め、日本の医療を客観的に見つめ直す契機となりました。患者中心の丁寧な診療やフラットな医療者間の関係性にも触れ、医療の在り方について多くの示唆を得ました。本経験を今後の学びに活かし、より良い医療に貢献できる人材となるべく研鑽を積んでまいります。このような貴重な機会をご支援いただき、心より御礼申し上げます。



シドニー大学の整形外科の実習は、やりたいと言ったことは全てやらせて頂ける、とても幸せな環境でした。とはいえ英語力と医学知識のなさから何も出来ず悔し涙を流した日も多かったですが、今の実力で出来ることはやりきることができました。1ヶ月を経て、海外のチームに純日本人として貢献できるようになるには、何枚もの分厚い壁が目の前にあると知りました。しかし、日本を外から批判的に見ることの重要性に触れ、自分の世界は明らかに広がりました。日本にいてだけでは絶対に得られない刺激と喜びを得ることができ、海外で医師として働くことが自分の人生にとって絶対に必要な学びであるという確信を得ました。今回の実習は自分の実力を図り、将来について真剣に考え、努力を続ける決意を固めることのできた、この上なく有意義な実習となりました。本機会を与えて下さった全ての方々に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。



Universitätsklinikums Tübingen

今回の留学では、消化器内科の病棟、外来、内視鏡、エコー検査など幅広い診療に参加し、日本とドイツの医療体制の共通点と相違点を学びました。特に、専門分業制や移植後管理、国外ならではの症例を通して、臨床の見方を大きく広げることができました。また、エコー手技を実際に繰り返し経験し、知識だけでなく実践面でも成長を実感いたしました。このような貴重な学びの機会が、寄付によって支えられていることに深く感謝しております。



ドイツのテュービンゲン大学病院にて、神経内科を中心とした臨床実習を行いました。実習では、神経腫瘍、神経変性疾患、小児神経、てんかんなど幅広い分野の外来・病棟実習に参加し、手術見学やカンファレンスにも参加する機会をいただきました。外来では主に診療の見学を行い、病棟では診察や採血などの手技も経験しました。ドイツ語で行われる診療を通じて、海外の医療現場における語学力の重要性を実感するとともに、日本とは異なる医療体制、多職種連携、臨床と研究のつながりについて学ぶことができました。今回の留学で得た学びを、今後の医学の学習、研究活動、将来の進路に生かしていきたいと考えています。このような貴重な機会をいただけたのは、多くの方々からのご寄付とご支援のおかげであり、心より感謝申し上げます。いただいたご支援への感謝を忘れず、今回の経験を今後の学びと将来の医療・研究への貢献につなげていきたいと考えています。



Vall d'Hebron University Hospital

この度は多大なるご支援を賜り、心より御礼申し上げます。皆様の温かいお力添えにより、スペイン・バルセロナの Vall d'Hebron 大学病院にて、1ヶ月間にわたる脊椎外科および外傷外科での臨床実習を無事に終了いたしました。

本実習では、国内では見学機会に限られる外傷手術を中心に学びました。多くの症例で直接手洗いが許可され、指導医による英語での解説のもと、非常に実践的で充実した経験を得ることができました。また、現地の医学生や欧州各国からの留学生とともに、英語や自身のスペイン語を交えて積極的にコミュニケーションを図る中で、各国の医療制度や文化の違いを肌で感じ、自身の視野を大きく広げることができました。

単身での個人応募という挑戦でしたが、この貴重な経験は、将来国際的な視野を持つ医師として患者様に貢献するための大きな糧となりました。皆様からのご支援に深く感謝し、今後も医学の学びに全力で邁進してまいります。



Washington University in St. Louis

慶應義塾大学医学部 106 回生の柴田航と申します。本報告書では私の Washington University in St. Louis(以下、WashU)での経験をご報告させていただきます。

私は同期 4 名とともに 2026 年 3 月 9 日～同年 4 月 5 日までの期間、米国中西部セントルイスに位置する WashU にて臨床実習に参加しました。私は Gastrointestinal (GI) consult ならびに Hepatology consult を 2 週間ずつ回るプログラムを選択しました。前半 2 週間では、消化管出血または嚥下困難の患者を担当し、後半 2 週間では重度肝障害の患者の肝移植を含めた治療介入について学びました。実習中は自ら聴取した病歴とカルテ情報に基づき立案した治療プランを上級医にプレゼンするという日本の実習にはない内容も含まれていました。慣れない環境下で試行錯誤する過程は、これまでに味わったことの充実感を伴うものでした。

最後になりますが、本活動のためにご寄付を賜りました皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。皆様のご支援の下、得た経験を糧に今後も研鑽を積んでまいります。



寮から撮影した実習先の病院

Washington University in St. Louis の Cardiothoracic ICU での実習で、心臓胸部外科術後患者および重篤な循環・呼吸不全患者の全身管理を学んだ。専門ごとに細分化された ICU において、集中治療専門医である Intensivist が中心となり、多職種が高度に連携しながら補助循環装置を積極的に用いて管理する体制は、米国、更に当院に特徴的であった。刻々と変化するバイタルサインや検査値を経時的に捉えて全体の傾向を把握し、今後の挙動を予測して治療方針を導く、洗練された思考過程に触れた。担当症例を受け持ち、身体診察や心エコーで自ら取った身体所見と体液バランスなどの数値情報の双方に基づき、病態のみならず全身状態を評価する視点を主体的に学んだ。





EBM を実践しつつ鎮静・鎮痛下でも患者負担の少ない治療を追求し、家族と丁寧に対話する姿勢を見て、将来目指したい医師像に出逢うことができた。充実した実習の実現にご尽力いただきました先生方ならびにご寄付を賜りました皆様に深く感謝申し上げます。

本留学では、Washington University in St. Louis にて、米国ならではの教育的かつ実践的な環境の中で感染症診療に参加いたしました。日々の回診やカンファレンスでは、エビデンスに基づいた意思決定を前提に、職種や立場に関わらず活発な議論が行われ、学生であってもチームの一員として積極的に意見を求められる点が非常に印象的でした。実際に患者を受け持ち、鑑別診断の構築から検査・治療方針の立案、英語でのプレゼンテーションまでを一貫して経験する中で、臨床推論力と発信力を大きく向上させることができました。また、多様な症例に継続的に関わることで主体的に学び続ける姿勢の重要性を実感いたしました。本プログラムは皆様からの温かいご支援により成り立っており、このような貴重な機会を賜りましたことに心より感謝申し上げます。本経験を今後の学習および臨床に還元してまいります。





私は今回、Washington University in St. Louis の Inpatient Oncology Consultation Service にて Clinical clerkship をさせていただきました。入院中のがん患者さんに対するコンサルテーション診療に携わり、問診・診察、プレゼンテーション、カルテ記載を通して、腫瘍内科医が多職種と連携しながら診療を行う実際を学ぶことができました。初めての米国での本格的な臨床実習であり、



大変に感じる場面もありましたが、周囲の方々に支えていただきながら、積極的に診療や学びに関わることができたと感じています。転移性腫瘍や免疫チェックポイント阻害薬による有害事象などの重症例を経験し、腫瘍のみならず全身状態や生活背景を含めた総合的な判断の重要性を実感しました。本留学では、米国で働いていらっしゃるたくさんの日本人の先生にお会いすることもでき、将来の進路を具体的に考える貴重な機会

ともなりました。支えてくださった先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

慶應義塾大学医学部 6 年の定岡夏美と申します。この度、Washington University in St. Louis の Barnes-Jewish Hospital にて、Emergency Department での 4 週間の臨床実習に参加させていただきました。本報告書では、実習の内容とそこで得た学びについてご報告申し上げます。救急外来では患者の問診・身体診察を行い、鑑別診断、必要な検査・治療方針まで含めて英語で指導医へプレゼンテーションする経験を重ね、救急診療における臨床推論力と発信力を養うことができました。また、銃創や薬物中毒など日本では稀な症例、多職種連携による救急医療、さらに社会的背景を抱える患者への対応を通じ、医療と社会のつながりについても深く学びました。これらの貴重な学びの機会、ご寄付によるご支援があってこそ実現したものです。心より感謝申し上げます。今後は本留学で得た知識と経験を生かし、日本の医療に貢献できるよう一層努力してまいります。